



藪の中

芥川龍之介



青空文庫



青空
文庫

検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

1 藪の中

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違いちがいございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参まりました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸しがいがあつたのでございます。あつた処ところでございますか？ それは山科やましなの駅路えきぢからは、四五町ほど隔へたつて居ゐりましょう。竹の中に瘦やせ杉まじの交まじつた、人ひと気けのない所ところでございます。

死骸は縹ほなだの水干すいかんに、都風みやこふうのさび烏帽子をかぶつたま

ま、仰向けあおむに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなとは申す

ものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。

いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかつたか？ いえ、何もござい
ません。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて

居りました。それから、——そうそう、繩のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございませぬ。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通かよう路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師たびほうしの物語

あの死骸の男には、確かに昨日きのうあ遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃ひるごろでございましょう。場所は関山せきやまから山科やましなへ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子むしを垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重はぎがさねらしい、衣きぬの色ばかりでございます。馬は月毛つきげの、——確か

法師ほうし髪がみの馬うまのようようでござごいいましたましたしたた。丈たけでござごいいますすか？ 丈たけは四寸よきもござごいいましたましたしか？ ——何なにしろ沙門しゃもんの事ことでござごいいますすから、その辺へんははつきり存ぞんじませません。男おとこは、——いえ、太刀たちも帯おびびびて居おれば、弓矢ゆみやも携たずええて居おりましたしたた。殊ことに黒くろい塗ぬり籠かごへ、二十にじゅうあまり征そ矢やをささしたたのは、ただ今いまでもはつきり覚おぼえて居おりますす。

あの男おとこがかようようにななろううとは、夢ゆめにも思おもわわずずに居おりましたしたたが、真まことに人ひと間まの命いのちなぞなは、如露にょろ亦やく如電にょでんに違ちがいいござごいいませませんん。やれやれ、何なにとも申まししよううのない、気きの毒どくな事ことを致いたしまましたしたた。

検非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしがから搦め取った男でございますか？　これは確
 かに多襄丸たじようまると云う、名高い盗人ぬすびとでございます。もつと
 もわたしがから搦め取った時には、馬から落ちたのでござ
 いました。栗田口あわだぐちの石橋いしはしの上に、うんうん呻うなつて居
 りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜さくやの初更しよこう
 頃でございます。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時にも、
 やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りま

した。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さ
え携たすきえて居ります。さようでございますか？ あ之死
骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたの
は、この多襄丸に違いございません。革かわを巻いた弓、
黒塗りの籠えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、——これは皆、あ
の男が持っていたものでございましょう。はい。馬も
おつしやる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございます。その
畜生ちくしょうに落されるとは、何かの因縁いんねんに違いございません。
それは石橋の少し先に、長い端綱はづなを引いたまま、路ば
たの青芒あおすすきを食って居りました。

この多襄丸たじょうまると云うやつは、洛中らくちゆうに徘徊する盗人の中
 でも、女好きのやつでございます。昨年とりべでらの秋鳥部寺の
 賓頭びんずる盧うしろの後の山に、物詣ものもうでに来たらしい女房が一人、
 女の童わらわと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業しわざだ
 とか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、
 こいつがああの男を殺したとなれば、どこへどうしたか
 わかりません。差出さしでがましゆうございしますが、それも
 御詮議ごせんぎ下さいまし。

検非違使に問われたる媼おうなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたづいた男でござい
ます。が、都のものではございませぬ。若狭わかさの国府こくふの
侍でございます。名は金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でご
ざいました。いえ、優しい気立きだてでございますから、
遺恨いこんなぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさご、年は十九歳で
ございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気かちきの女で

ございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持つた事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりざねがおでございます。

武弘は昨日娘きのうと一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、壻むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびと

のやつでございます。婿ばかりか、娘までも……
(跡は泣き入りて言葉なし)

×

×

×

たじようまる
多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しは
しません。ではどこへ行つたのか？ それはわたしに
もわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら
拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されますまい。
その上わたしもこうなれば、卑怯ひきような隠し立てはしない
つもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いまし

た。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間あいだに、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、

腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りっぱに生きています、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。

が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あはいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うすめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それ

から、———どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時ほんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かわに渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまつたのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町ほどあいだ行つた処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合つごうの好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう瘦やせ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎まばらになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだけに、力は相当にあつたよう

ですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄なわですか？ 縄は盗人ぬすびとの有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんかから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張ほおほらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したららしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星ずぼしに当つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠いちめがさを脱いだまま、わ

たしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられていて、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出していたか、きらりと小刀さすを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見つた事がありません。もしその時でも油断していたら、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸たじようまるですから、どうにかこうにか太刀も抜か

ずに、とうとう小刀さすがを打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、———そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見

せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わた

しの念頭ねんとうにあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑いやしい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒けたおしても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀たちに、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那せつな、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯ひきような殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをし

ろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相けっそうを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利きかず、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目ごうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下
げたなり、女の方を振り返りました。すると、——ど
うです、あの女はどこにもいないではありませんか？
わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探し
て見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも
残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるの
はただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早
いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げた
のかも知れない。——わたしはそう考えると、今度は

わたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。やまみちそこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますくちかずまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は檣おうちの梢こずえに、懸ける首こうぜんと思つていますから、どうか極刑ごくけいに遇わせて下さい。
(昂然こうぜんたる態度)

清水寺に来れる女の懺悔ざんげ

——その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛むすられた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念むねんだったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体中からだじゅうにかかった縄目なわめは、一層いっそうひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶころように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とっさの間に、わたしをそこへ蹴倒あいだ

しました。ちようどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みぶるいが出ずにはいられません。口さえ一言いちごんも利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃ひらめいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さいげすんだ、冷たい光だったではありませんか？

わたしは男に蹴くられたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫なんだぎり、とうとう気を

失つてしまいました。

その内にやつと気がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行つていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑あはれみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りま

した。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌いまわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しました。が、あの盗人ぬすびとに奪ぬわれたので

しよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀さすがだけは、わたしの足もとに落ちていたのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇くちびるを動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだ

まま、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失つてしまつたのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじつた杉むらの空から、西日が一すじ落ちていゝのです。わたしは泣き声を呑みながら、死骸しがいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたし

には、申し上げる力もありません。とにかくわたしは
どうしても、死に切る力がなかったのです。小刀さすを喉のど
に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろい
ろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている
限り、これも自慢じまんにはなりません。〔寂しき微笑〕わ
たしのように腑甲斐ふがいないものは、大慈大悲の
観世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。
しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇つたわ
たしは、一体どうすれば好よいのでしょうか？ 一体わた
しは、——わたしは、——〔突然烈しき歔歔すすりなき）

巫女みこの口を借りたる死霊の物語

——盗人ぬすびとは妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利きけない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄然しやうぜんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それが

どうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたましさに身みも悶もえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合あうまい。そんな夫に連れ添よっているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大だい胆たんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。し

かしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有ちゆううちゆうに迷つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚しんいに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色がんしよくを失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあ

の人が生きていては、あなたと一しよにはいられませ
ん。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立て
た。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のよ
うに、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落
そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人
間の口を出た事があるうか？ 一度でもこのくらい呪のろ
わしい言葉が、人間の耳に触れた事があるうか？ 一
度でもこのくらい、——（突然 迸ほとばしるごとちようしようき嘲笑）その言
葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの
人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の

腕すがに縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すと

も殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内

に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされた、

(再びふたたび迸るごとき嘲笑) 盗人は静かに両腕を組むと、

おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもり

だ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ

頷うなずけば好よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、

盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。(再び、長き沈黙)

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ひびぶが早いのか、

たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とっさに飛びか

かつたが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後のち、太刀たちや弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄なわを切つた。「今度はおれの身上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟つぶやいたのを覚えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？

(三度みたび、長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀さすが一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺さした。何か腥なまぐさい塊かたまりがおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰やまかげの藪の空には、小鳥一羽ひな囀なえずりに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれ

ている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀さすがを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮あふが溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中ちゆう有ゆうの闇へ沈んでしまった。……

(大正十年十二月)



藪の中

芥川龍之介 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「芥川龍之介全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和 62) 年 1 月 27 日第 1 刷発行

1996 (平成 8) 年 7 月 15 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和 46) 年 3 月～1971 (昭和 46) 年 11 月

※ 底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。

→ ヒラギノ角ゴシック ProN W6 にしました。

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ